

# 関係人口増加による 地域活性化

月刊『ソトコト』編集長 指出 一正

## 人と人との関係をプロデュース

私は、社会と環境をテーマにした雑誌『ソトコト』の編集長をしています。関係人口に関し、見聞きしてきた地域の状況をお伝えします。雑誌の編集部は東京・神田にあり、私は週に2日間東京で働き、残る5日間は全国各地を訪問しています。まちづくりに携わる若者や、未来づくりをしている先輩にお話をうかがい、プロジェクトに伴走し、講演などをすることも多々あります。

私が地域を見る最初の視点は非常にシンプルです。私の趣味は釣りで、釣り人として淡水魚を確認します。1つはイワナかアマゴがいるかどうか、もう1つは在来のタナゴがいるかどうかです。この2つが普通に生息する流域を持っているエリアをリサーチしたところ、全国で大きく4エリアだけでした。その1つが秋田です。ある日、講義を終えると、秋田に行ったという都内の若者が駆け寄ってきました。「東北には300年から400年も続く味噌蔵や醤油蔵があって、若い人たちがリノベーションしながら蔵を守っている。秋田の大ファンになりました」と話してくれて、自然や文化を大事にしている地域には、面々と受け継がれたカルチャーがあり、クリエイティブでファンタジーにあふれていると感じます。

釣り人の私が持ち歩いているポケット水槽は小さなサイズです。先般、琵琶湖でタナゴを釣り上げました。上から見るとただの雑魚にしか見えませんが、横から見るとコバルトグリーンやメタリッ

クオレンジの輝きを放っています。地域を見るときも、いろんな角度から見る必要で、私は「地域の解像度を上げる」と表現しています。

今、皆さんは少子高齢化、人口急減の対策に力を入れていると思いますが、対策の前に、足元にあるすてきなものを発信することも必要ではないでしょうか。「地元が大好き」という若い人たちがいるなら、「地域の解像度を上げるレッスン」として若者の力を活かすことを期待しています。

『ソトコト』では去年の秋、まちづくりとまちしごとの求人サイト「イタ」をウェブにアップしました。市町村でも人材募集サイトを設けておられますが、イタは意識的にサイトの画面をシンプルなつくりにしました。些細なきっかけで若い人たちが地域を自分の目で発見してくれることに重点を置きました。

私は2016年に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ社）という本を出しました。その中で、観光以上、移住未満の第3の人口＝“関係人口”が、人口減少が進む中で地域を支える役割を果たしていくのではないかと述べました。さらに、観光で疲弊した地域が増え、本当に地元の人たちの幸せなのか、観光一辺倒でいいのかと問いかけました。また、これからは従来型の観光協会ではなく、人と人との関係をプロデュースする“関係案内所”をつくるべきだとも書きました。

この本は研究者の目にとまったようで、私は総務省や財務省、内閣官房の事務方・大臣などにも呼ばれ持論を述べました。関係人口に関する予算の振り分けも尋ねられ、私はいつしか「『関係人

## 指出一正（さしで かずまさ）

### 略歴

1969年群馬県生まれ。上智大学法学部国際関係法学科卒業。雑誌『Out door』編集部、「Rod and Reel」編集長を経て現職。島根県「しまこトアカデミー」、奈良県「奥大和アカデミー」、奈良県下北山村「奈良・下北山むらこトアカデミー」、福井県大野市「越前おおのみずこトアカデミー」、和歌山県田辺市「たなこトアカデミー」、高知県津野町「地域の編集学校 四万十川源流点校」のメイン講師。岡山県真庭市政策アドバイザーをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「わくわく地方生活実現会議」委員。内閣官房「水循環の推進に関する有識者会議」委員。環境省「SDGs 人材育成研修事業検討委員会」委員。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「人材組織の育成・関係人口に関する検討会」委員。国土交通省「ライフスタイルの多様化等に関する懇談会」委員。

著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。



口』の提唱者の一人」などと言われるようになり、2012年頃から市町村から依頼をいただいて、関係人口をつくる講座の講師を務め、今も続けています。訪問先の一部を紹介します。

四万十川の源流地、高知県津野町では、「地域の編集学校 四万十川源流点校」という講座を開きました。町は観光客の招き入れに苦戦していて、「若者が町にやって来る流れをつくってほしい」と依頼され、地域の編集者を育てる講座を開講したのです。昨年の秋は、高知市内の大学生グループなど20名以上の若者が集まりました。受講の動機を聞くと、「地域とかかわり合える場と出会いを探していました」「地域にしかない魅力を編集できそう」という答えが返ってきました。

若者たちが町の新しい未来をディレクションしていこうとしているのは、頼もしい限りです。彼らがつくってくれたプロジェクトのアイデアは、「使われなくなった小学校のプールに水を張って、アマゴの釣堀をつくる」など、とても痛快。常々私は、若い人の発想がなければ若い人は呼べないと思っています。町に若者たちのコミュニティができたことがうれしいですね。

### 「第3の人口」がいるおもしろさ

「関係人口」という言葉をひも解きます。そもそもは2010年頃からその感覚や行動が意識され、使われ始めました。言葉の本意を簡潔に言うと、「交流人口」でも「定住人口」でもない「第3の人口」です。「あの子は週末になるとまちに来ている」

「地元と一緒にあって新しいイベントを開いている」「高齢者と楽しそうに話している」。そんな人が地域にとっての関係人口です。人の温かみ、面倒くささ、汗臭さといったものも含め、生身の地域と接することを楽しむ若者たちを言語化したのが関係人口なのです。

全国各地で少ない若者の奪い合いが展開されるようになり、今もその渦中にあります。関係人口を最初に増やそうと試みたのは島根県です。国の「地方創生」が始まる2年前の2012年、県から私に「関係人口を増やしたい」という依頼がありました。島根は1992年から人口が急激に減少し、93年には「ふるさと島根定住財団」という、移住・定住の相談に応じる公益財団が誕生するなど、若者を呼び込むことに力を注ぎ、移住に関するビッグデータも多く収集していました。

しかし、移住者が増えても、その分、ほかの地域では人口が減ることになるという悩みを抱えていました。少ない人口の奪い合いへの懸念です。私が依頼されたのは、「移住しなくてもいいから、東京などで島根のことを考えてくれる人を増やす講座をつくれませんか」というもの。開講して8年を迎えます。大阪でも開講して5年が経ち、今年も広島でも開講します。これまでの修了生は200人以上で、うち40人くらいが島根に移住しています。しかも、8割から9割は島根で起業してくれました。お年寄りのための音楽療法を運営する社団法人をつくったり、休耕田を金魚の養殖場として活用するなど活躍しています。

奈良県最南東部にある人口約800人の下北山村

からも、関係人口を増やす講座の開催を依頼されました。開講にあたり、私は「下北山村には夏はたくさんの若者がやってきます。西日本でランキングが1位クラスのキャンプ場があって、サッカーやテニスの合宿にぴったりのスポーツ公園村もあります。夏期のレクリエーション施設には事欠きません。それとはまた違う流れで、大都市の若い女性たちがやってくるような流れをつくりましょう」と話しました。

1回目の修了者は12人くらいだったでしょうか。毎年、10人前後が受けてくれる小さな講座です。ただ少人数のほうが効果はあると思います。開講4年目を迎えましたが、修了生の中には、毎年、東京・日本橋で下北山村のPRイベントを開催したり、地場産品を使った「めはりずし」をアピールするなどの動きがあります。若者たちがしっかり村を見つめた成果と言えるでしょう。

村には、明神池を御神体の一つとする池神社があります。何やらいいことがありそうだと御神体が感じると、池の底から古木が浮かび上がって、ゆっくりと水面をぐるぐる回るそうです。また、村には「前鬼ブルー」と表される前鬼川という美しい溪流があり、上流には鬼が住んでいます。かつて役行者に仕えた、「前鬼（夫）」「後鬼（妻）」がいて、今は61代目の五鬼助義之さん夫婦が1300年続く宿坊を継承しておられます。受講生たちが五鬼助さんに話を聞くと、「私は鬼の末裔です」と古文書を見せてくれます。若者たちはわくわくしながら、「この村、めっちゃ楽しい」「お母さんのめはりずしは神わざだ」と。手前みその「南朝みそ」、在来野菜を使っためはりずし、どれも地で採れる最高級の食材が使われています。若者たちは村が大好きになり、やがて自分には何ができるかを考えるようになります。

村や村のみなさんは「村を訪れた若者が現れ始めた。長いときには3か月も村にいてくれる。何かやってやらないと」と考えてくれて、ゲストハウスが3棟誕生しました。さらに、廃園になった幼稚園舎をリノベーションし、リモートワークやワーケーション、コワーキングスペースとして、多

様な働き方に対応したオフィス空間を整備しました。心の病を患った人たちをサポートするベンチャー企業で働いている女性や、ローカルメディアの編集部勤める女性などが常駐しています。夜になると、若い人たちは村長を囲み、村の未来を語り合います。若者たちによって村は大きく変わりました。

小さな村にやって来る移住者・訪問者は、海外からの若者などもいて多彩です。村の人は若い人がいることを楽しんでいる様子です。村長は「最近、村の人から『若い人が増えた。村長も役場も、頑張っているな。村が明るくなった』」と言われたとのこと。若い人たちが村を歩いている光景は、村にとって一種のおもしろみになっているようです。

## 「関わりしろ」にコミット ～女子大生がスナック?!

奈良県天川村には、「天の川」という美しい川があり、この村の関係人口の講座からローカルプロジェクト「スナックミルクィー」が生まれました。洞川地区には芸能の神様が祀られた天河弁財天大社があります。天川村で生まれたプロジェクトを紹介します。

招き入れるターゲットは東京や大阪の若者ではなく、名古屋の若者です。こと関係人口に関しては仙台、名古屋、神戸、京都などにいる若者もおもしろさを感じてくれるようです。私は、村役場をお願いをしました。「2泊3日で村を見てもらうのですが、『ハレ（非日常）とケ（日常）』でいうところの『ケ』だけを見せてください」。玄関口ではなく、勝手口から入ってもらうように日常を見てほしいという意図です。私は「関わりしろ（関わる余地）」と表現しているのですが、ある意味、弱さやほころびを抱えているような市町村の方が、若者にとって関わりしろが大きいと思います。

天川村は、間伐材からバイオマス燃料をつくっています。地元のおじさんたちに間伐材を運んでもらい、地域通貨をわたす方が地域のためになると考えました。通貨を受け取ったおじさんたちは、

喜々とした表情で、酒屋で買い物をして帰宅します。そんな話を村の職員が若者に説明すると、若者たちは村への信頼感・安心感が高まるようです。やがて村の関わりしるに、若者がしっかりとコミットしていきます。

さらに私は受講生たちにお願ひしました。「せっかく天川村に若者が来られたのだから、滞在中に楽しめるプロジェクトを考えませんか」。最初に手を挙げたのが、名城大学の女子大生たち。「スナックをやります」と言ってくれたのです。私が「スナックに行ったことあるの」と聞くと、「行ったことはないけど、何かダサくて、格好悪くて、イケてない感じがする」とのこと。彼女たちは「スナックミルクキー」をオープンしました。

彼女たちは、実のおばあちゃんから割烹着を借りて店に立ちました。どう見ても小料理屋です。最初に来店したのは、区長やまちづくりをやっている旦那衆です。名古屋から来た女の子たちが何をやるのか興味津々。女子大生は見よう見まねで爛をつけます。お酒は「名古屋縛り」で、村の旦那衆は飲んだことはありません。おつまみは「しるこサンド」です。「何やこれ、めっちゃ甘っ」と旦那衆はのけぞりました。しかし来客数は80名以上でした。

店のにぎわいに誘われたのか、洞川温泉に泊まりに来ていた若いカップルが店をのぞきました。女性の「今日は私の誕生日です」という言葉に、区長と女子大生はひそひそ話をし、サプライズプレゼントを用意。豆腐を使ったパースデーケーキです。村にはコンビニもケーキ屋ありません。閉店した近所の豆腐屋から豆腐を分けてもらいケーキ仕立てにして、ろうそくを3本刺しました。来店した女性は「村に初めて来ましたが、すてきな方々がお住まいなのですね」という言葉をくれました。もし、スナックミルクキーがなかったら、カップルたちは旅館で食事をしてお風呂に入り、翌朝こんな会話をしたかもしれません。「温泉よかったな。今度は城崎温泉にでも行こうか」。

関係人口を増やすことは、地域にとって「心の過疎」の食い止めにもなる。「まちには何も無い

という言葉が発している地域は、心の過疎も進んでいるように感じます。どの地域でもまちづくりや未来づくりをおもしろいと思ってくれる人たちを増やすことは可能です。下北山村や天川村で見た変化を起こすことができると思います。

スナックミルクキーに関わった学生たちは今、京都、奈良、愛知・岡崎や新城、東京・日本橋で、村を紹介するイベントに関わってくれています。イベントはとても大事。地域に興味があるものの、どう接点を持っていいかわからない人たちに、若い感性を活かした接点づくりを期待できるからです。地方創生のバトンを若者にわたせると、他地域の若者たちがローカルに興味を持ってくれるでしょう。

## 「イワシビル」で働く女性スタッフ

私は「関係人口を増やす上で必要なものは何ですか」という質問を多く受けます。2つ必要なものがあります。1つ目は、関係人口を迎え入れる人たちがいるかどうか。2つ目は、人と人との関係をプロデュースする“関係案内所”があるかどうかです。ラーメン屋、カフェ、ゲストハウス、業態は何でもかまいません。案内所を見事に具現化している地域を紹介します。

鹿児島県阿久根市に、ショップ&カフェ、いわしの瓶詰工場、ゲストハウスを併設した「イワシビル」があります。2017年9月、80年続く丸干し屋の下園薩男商店がなくなりました。先代の社長が、シャッター商店街となっていた場所にある3階建てのビルを買い、息子である現社長に「自由に使ってみろ」と託しました。現社長の下園正博さんは困ったそうです。その予算があれば、海を見下ろせる見晴らしい場所にカフェやバルやレストランがつかれると思ったからです。しかしお父さんは浜の男。市場での底値を見きって、今が買いどきと考えたのは正解でした。

改装されたイワシビルで働く若い女性スタッフは、専門学校生、短大生、大学を卒業して間もない5人。北薩地域が大好きです。でも、もしイワ

シビルという働く場がなかったら、彼女たちは北薩にはいなかったでしょう。地域が好きでも居住地を変えなければならないという現実、皆さんの地域でも日常茶飯事だと思います。下園さんには若い人たちが地元に残ってほしいという意図もあったそうです。ビル1階のショップに並んでいる商品は、下園さんとスタッフが開発したもの。いわしのオリーブオイル漬け瓶詰「旅する丸干し」、ボンタンの間伐材を使ったカッティングボード、小魚を利用したグラノーラ「Kots」という商品などがあります。Kotsのパッケージはアーティストの西野カナさんのデザインチームが手掛けました。女性スタッフが西野さんのことが大好きで、思いきって西野さんのデザインチームに「もし可能だったら、西野カナさんっぽい感じのラベルをつくってもらえませんか」と連絡。おもしろそうな依頼にデザインチームは「やります！」と大いに盛り上がったそうです。

2階にはイワシの瓶詰工場があります。下園さんは、北薩全体を俯瞰できるような「小さくても優しい仕事をしましょう」、地物のいわしを大事にして「未来につながる仕事をしよう」とスタッフに話したといいます。3階にあるのはゲストハウス。ゲストハウスができたことによって、今まで通過地点だった阿久根にとどまる動きができました。中でも鹿児島大学の学生を引き寄せたのは、下園さんがまちの未来を考えていることへの共鳴だと思います。ご飯を食べ、間食でたい焼きを食べ、下園さんの失敗談やうまくいった話を聞くと、若者はわくわくするようです。泊った学生が新たな学生を呼び込むサイクルができました。

人と人の関係をアテンドする上で大事なものは、循環・連鎖といった関係性をどのくらいつくれるかだと思います。1人であっても地域を変えることはできるのです。

## 未来を担う人材を育てる

宮崎県新富町は農業が盛んな町です。2017年春、町は観光協会をなくすという決断をし、拠出して

いた予算を地元の若者たちの育成に注ぎ込みました。地域商社「こゆ財団」をつくり、地域商品を開発するというテーマのもと、地元の若者たちを育成し、未来を担う人材を育てようとしたのです。

全国から農業、IT、クラウドファンディング、リモートワーク、地域の編集、コミュニティーデザインなどで実績を残した20代、30代のヒーローを呼び、若者たちと交流してもらいました。失敗談も成功談も聞いた若者たちには、いろいろな学びがありました。やがて1粒1,000円のライチが商品化されたり、在来きゅうりのブランディングを試みたり、そば粉を使った高級スイーツが誕生するなどの動きが出てきました。

観光協会で事務職をしていた女性は、「協会にいるときは、まちの未来を自分事として捉えていなかった。今はまちの未来を考えています」と話してくれました。そして、「こゆ野菜カフェ」をオープンさせました。人と人が集まる、つながれる場所をつくりたいという思いで開店したそうです。地元野菜を使った焼き野菜のカレー、スムージーが名物になりました。

地域商社の財団運営財源は、主にふるさと納税です。観光協会でもふるさと納税で運営していましたが、財団では協会に比べ10倍以上の売上を記録。若い職員は自分のまちだけでなく、他の地域であっても、すてきな農産物を扱っている人がいたら、「新たな商品を開発しませんか」と声をかけます。常にまちの未来に必要なものは何かを探しているのです。また、地元の商店街は、若者が自由に使える「チャレンジフィールド」を整備し、活用してもらっています。

## みずから行動を起こし 地域の魅力を発信する

福井県大野市では3年前から「越前おおのみずコトアカデミー」を開講しています。大野市は水を大事にしている地域で、上水道の利用率は2割、多くの市民は地下水を使っています。大野市を例に、関係人口を迎え入れているのは、どういう人たちなのかをお話しします。

城下町として文化が育まれてきた大野市泉町には「御清水（オショウズ）」という湧水がある美しいまちなのですが、「おもしろいことが起きづらい」と感じたまちの若者たちがいて、「ミズカラ（越前おおの水をたべるレストラン実行委員会）」を結成しました。みずから行動を起こす、大野の水をもとにしてというふたつの意味から、まちづくりやローカルプロジェクトを展開しています。

メンバーは介護福祉士、工務店の社員、喫茶店経営者など。彼らは年に1度、「みずをたべるレストラン」というプロジェクトを行いました。プロジェクトは、打波川という溪流の河畔で催す「ダイニングアウト」、要はご飯会です。間伐材を使ってテーブルや小屋をつくって、山ぶどうを使ったスパークリングワイン、里芋の煮ころがしをすり潰してフライにした“煮ころがしバーガー”などを供しています。小屋の設計は工務店勤務の男性がしました。この日、集まったのは、大野のことが好きな関係人口の皆さんです。料理を盛るお盆は朱塗で、古民家で大事にされていた逸品。盆の上には、河畔にある葉っぱをうまくあしらって、料理が盛りつけられます。

介護福祉士の女性2人が、まちをおもしろくしようと料理ユニットを結成しました。ソトコト編集部でSNSにアップしたら、アメリカの大手のSNSの企業から連絡があり、「写真の画像はとて日本人的なので、日本の美しさを表彰する部門のアワードを授与したい」とのことでした。うれしかったのは、プロフェッショナルなフードスタイリストの手によるものではなく、日々、育児や親御さんとの関係などがあるにもかかわらず、若い人たちが集まって「何を出そうか」「どんな盛りつけにしようか」と考えてつくったおぜんが海外からも評価されたことです。前業後のメインディッシュは、冷水性魚類の最高級食材と言われる「アジメドジョウ」をフリットした大皿です。町にあるものを編集して発信する、その極意のようなものが、アジメドジョウのフリットにはありますね。

何を掛け合わせ、みんなを喜ばせることができ

るのかを考え行動することが、地域の魅力を発信する本当の手腕だと思っています。

まちの魅力を伝えるとき、みんなが伝えられる魅力を探し出します。滝が美しい、歴史的人物が通った道など、たくさんあるでしょう。でも、それは子どもが乗り物玩具をひたすら集めているのと何ら変わりありません。他の地域との差が出ないのです。本当の差別化は、いいものとまちの弱さの掛け合わせから生まれます。いいものと弱い部分を掛け合わせれば、雑味や強いものが生まれます。「みんなが喜ぶものを大野の食材でやってみたい」と考えたとき、彼らに浮かんだのがドジョウでした。もちろん、お店や地元産品など、どれでもかまいませんから地域を編集してほしいと思っています。

## 地域をおもしろくするには

私は、地域の若者たちに、地域をおもしろく発信する視点をどう育むかを大事にしています。もちろん、若くなくていいですよ。鹿児島県曾於市では平均年齢70歳のおじさまたちが、プロジェクトを催し、情報を発信して、地域おこし協力隊でやって来た女の子たちが合流するという好循環が生まれています。

地域をおもしろくする原則を整理します。

まずは、地方で幸せを見つけるような地域活性化の瞬間を感じさせるソーシャルな視点を持った案内所的な場を整備することです。単に「未来をみんなで考えましょう」と言われても、何かしっくりきません。未来を考える訓練できる場があれば好ましいと思います。

次に、自分事として地域を楽しめるかどうかです。地域によっては、関係人口をファンとかサポーター的な視点でとらえる向きがあり、地元の人が「君は観光で来ているのか」「ボランティアですか」といった旧来のカテゴライズをした視点で、来訪者を見ます。しかし「来てくれてうれしいな。ゆっくり見てください」といった、やわらかな気持ちで接していくのが望ましいと思います。